

最優秀賞

「命を見つめて」

埼玉県・武蔵越生高等学校2年 結城 和也

「晃（仮名）！目を開けて！わああ……」

泣き叫ぶ母親の声。一つの命が終わろうとしていた。僕は、あの日のことを決して忘れはしない。決して……。

中学2年の秋（10月27日）、この日から僕の生きる為の戦いが始まった。脳腫瘍から水頭症の合併症を併発した僕は、大学病院へ救急搬送され、即日緊急手術を受けた。術後、目を覚ました僕の体には無数の管が入り、その中の1本は、腫瘍の為に脊髄に降りなくなった脳髄液を体外に出す為に、頭の中に入っていた。それから数週間後、僕は主治医から告げられた。

「君は、脳腫瘍です……」

と。両親は、退院すると言って聞かない僕を治療に専念させる為に、告知することを決めたのだった。あまりのショックで椅子から立ち上がることも歩くこともできなかった。『俺は死ぬんだ……』その思いで押し潰されそうだった。言い知れぬ恐怖、身の置き場のない不安、誰も何も信じられない。だけど、いつも誰かに側にいて欲しかった。そんな僕の隣のベッドには、僕と同年の晃君がいた。彼も僕と同じ脳腫瘍だったが、彼は悪性の神経芽腫^{がしゅ}で、僕が入院してきたときには既に片目の光を失い、半身麻痺で寝たきりの状態だった。時折聞こえる彼の声は弱々しく、

「何か欲しいものない？」

との母親の問い掛けに

「アイスクリーム……」

と答える。直ぐに病院内の売店に母親が買いに行く。そのたびに僕も御馳走になった。ささやかな喜びのひとつきだった。放射線治療が始まると、ひどい倦怠感と吐き気で、ベッドに横になっているのが精一杯の日が続いた。数日たった朝、トイレに行こうと起き上がったら、枕の上に沢山の髪の毛が抜け落ちていた。こうなることは事前説明で解っていたが、ショックで体が震えた。咄嗟に母に携帯で『髪の毛が沢山抜けた……』とメールした。直ぐに母から返信がきた、『落ちたのが髪の毛で良かったじゃない。命を落とした訳じゃないんだから頑張れ！』と。病気になる前は、何かと口うるさい両親のことをいなければいいと思ったことさえあった。そんな僕のことを両親は必死に支えてくれている。僕は一人じゃないことを気付かせてくれた。そんなある晩、晃君が危篤状態になった。次々に家族が来て口々に彼の名を呼んでいた。母親の泣き叫ぶ声、僕は頭から布団を被って耳をふさいだ。彼はその後、命を繋ぐ為の緊急手術となったが、再び病室に戻って来ることはなかった。僕は改めて、自分の病気は死と背中合わせなのだと思い知らされた。数ヶ月に及ぶ治療の末、僕は退院の日を迎えた。退院の日、病室から見た空は、どこまでも青く輝いて見えた。

病気をして僕は沢山のものを失った。しかし、沢山のことを学んだ。自分は決して一人ではないということ。沢山の人間に支えられ、生かされているのだと教えられた。この世の中に命と引き換えにしていいものなんて何もない。今こうして生きていること、明日を迎えられることは当たり前のことではなく幸せなことなのだと思われられた。僕は全ての人に知ってほしい。『生きたい』と心から願い病と戦っている人達がいることを。『生きていてほしい』と心から願い支えている家族がいることを。『生きたい、

死にたくない』と叫び力つきで死んでいく人達がいることを。イジメや苦しみから逃れる為に、自ら命を絶とうとしている人達に聞いてほしい。永遠に続く苦しみなんてない。生きたいと願いながら死んでいく人達の分も、頑張って生きぬいてほしい。まだまだ生きられる命なんだから。僕には再発の危険が後2年付きまとう。再発は僕にとっての「死」を意味している。俺は負けない、必ず生きぬいてみせる。僕を支えてくれたたくさんの人達への感謝の気持ちを忘れずに、いつの日か誰かの役に立てる生き方をしたい。生きているって凄いよ！ 奇跡だから。